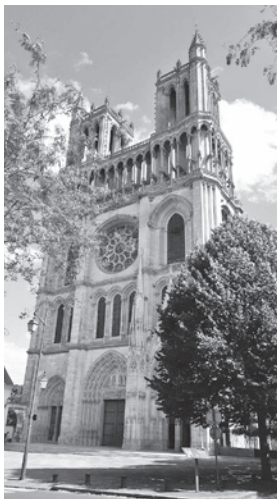
特集 世界のイースター

フランスのイースターは、とても華やかな雰囲気に包まれます。

まず目を引くのが、街中のスーパーマーケットやショコラティエや高級食料品店に溢れる卵やウサギ、そして教会の鐘の形をしたチョコレートの数々。それぞれに意味があり、イースターの象徴として昔から親しまれています。この卵型のチョコレートから、魚の形をしたチョコレートが沢山出てくることもあります。これはイースターが、４月１日のエイプリル・フール（フランスでは、４月の魚と呼ばれる）に近いからだと考えられます。日本ではバレンタインデーにチョコレートを贈る習慣がありますが、フランスではイースターにチョコレートを贈ります。



また雑貨屋さんには、卵型をしたカラフルな容器に入った卵型の石鹸が売られていて、これをプレゼントするのもとてもお洒落です。

家庭では、子供達が絵の具で卵に模様を描き、それを庭のあちこちに隠してエッグハントをします。フランスでは、イースターには家族で集まり、教会に行き、料理をし、プレゼント交換をしますので、クリスマスのような雰囲気でもあります。ただ、９月に始まり８月に終わる年度制をとっているフランスでは、イースターは年度末に向けて忙しくなる時期になりますので、実家を離れて勉強する学生達は、クリスマス休暇のようにのんびり実家に帰省することはできません。レポート提出の期限が迫り、学年末試験に向けての準備に追われてしまうのです。また、フランスの春休みはイースターに重なるように設定されていますが、フランス全土が３つのゾーンに分けられており、休暇の時期が地域によって異なります。これは休暇の時期をずらすことによって、旅費の高騰や交通機関の混雑を避けるために採用されているシステムです。よって、チョコレートの出現によってイースターを強く意識し、長い冬を越えて暖かい春の日差しを感じつつも、すぐに現実に引き戻されてしまう慌ただしい季節なのです。

余談になりますが、この時期にパリ郊外の高層ビルの麓を歩く際には、注意されるべきかもしれません！近所の子供達が、この時期に限って生卵を投げつけてくることがありますので、うまくよけないと悲惨なことになりますよ。

（井原由紀・浜田基督教会信徒）

第６回U26（ユージロー）全国集会を開催

２月22日から24日まで千葉県にある市川市少年自然の家を会場に第７回U26全国集会が行われました。U26とは「知る、つながる、教会の絆」をスローガンに活動する全国規模の青年グループです。年に一度開催されており、自分の教会や教区を越えた多くの仲間の存在を知り、刺激を受け合いながらつながりを深めることができます。

私は今回が３度目の参加で、「共に生きる」というテーマのもと、時間をかけて分かち合いを行いました。４部構成の分かち合いを行い、これまでの人生で「影響を受けた人」「影響を与えた人」「今後周りにどのような影響を与えられるのか」というお題で話をした後、参加者全員の前で自分の考えや思いを述べました。教会や教区で出会った青年たち、親や先生などいろんな人のエピソードを聞きながら自分自身についても考え直す良い機会となりました。

私は、これらの分かち合いを通して影響を受けるにしろ、与えるにしろ、人とのつながりを持っていないと何もできないと強く感じました。私には〝教会〟というつながりがあります。小さい頃から教会のキャンプや教区の中高生大会に参加し、教区内のいろんな所に友達がいます。しかし大学２年生の時、マレーシアで行われたCCEA東アジア青年大会に参加した事で他教区の青年とのつながりができました。この経験は私にとって、とても大きなものだったと実感しました。CCEAに参加した事でU26集会に誘ってもらい、毎年参加するようになり、今では全国に青年の友達がいます。

よく他教区の青年に「神戸教区は青年がたくさんいて、イベントも多くて良いね」と声をかけてもらいます。私自身もとても恵まれた環境だと感じます。しかし１歩、教区の外に出てみる事で違った経験ができたり、新たな出会いや発見があると思います。私が実際にそうでした。

今後、私はこれまで作ってきたつながりを大切にする事はもちろん、新たなつながりを得るため様々な場に出ていきたいと考えています。同時に、教区の青年にもつながる事の大切さや素晴らしさをもっと伝え、U26を始めとする様々な教区外の活動にも興味を持ってもらえるよう引き続き声かけを行っていきたいと思います。

（小林真綾・神戸聖ミカエル教会信徒）